

序

文

# 『國家と經濟』に題す

苦 米 地 英 俊

世に謂ふ學問に國境なしと。蓋しこれ學理の普遍性を高調したる語なり。種の保存には雌雄を要す、これ學理にして普遍的事實なり。寔に時と所とを超越するものゝ如く然り。然れども學理は畢竟するに抽象せられたる一面的眞理に過ぎず。これが複雑せる社會の實際に適應せらるゝに當つては、各環境に依て形態を異にするを免れず。結婚生活は必要且つ自然の要求なり。然れども結婚は時代國土に應じ又宗教道德乃至法律等に由り規矩準繩せらる。普遍的眞實に名を藉りて之を逸脱するは適正といふべからず。學理尊

ぶべし、現實無視は暴なり。

事全くこれと異れども、近時別箇の意義に於て學問に國境生じ、秘密主義流行し、學理の交流、文化相互の催進徒らに阻止せられ、その實狀は貿易障害に比し更に嚴なるを知る。現代は寔に學問鎖國主義時代たるの觀を呈せり。於是、苟も國家の進展を企圖せんとせば、各國独自の立場に於て國家的學問の建設、眞理の探究に邁往勇進せざるべからざるに至れり。

我が綠丘學園に於ける研究資料は何等誇るに足るべきものなく、寧ろその乏しきを憂ふと雖ども、研究の熱意と揮身の努力とは克く此の短を補ひ、學園舉つて相援け相勵まし、斯道を通じて報國に身命を捧げつゝあるは欣快に堪へざる所なり。此の言たる微塵も虚飾誇張を加へ事實を歪曲せるものにあらざれども、其の成果に至りては或は未だ全きを期する能はざるものあらむを懼る。果して然らば先進の叱正を乞ふて更に精進するも亦學徒の責務に

はあらしか。之れ商學討究の記念特輯號を世に送る所以なり。

今や曠古の國難に直面し、世局の激變に際會し、億兆一心、滅私奉公、東亞共榮圈を確立し、因て以て世界平和の樹立を期すべき秋なり。此の時に當り悠久二千六百年の皇紀を迎へ感激一しほ深さを覺ゆ。去る十一月十日の式典に參列の榮を負ひ、御前に「君が代は」を奉唱したる心情、感激の涙に胸迫り心ふるへざりしもの一人だにありしか。

「今や世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ判カルル所ナリ」と宣まはせられたる玉音に身振へ、感銘、奮起せざりしもの果してありしか。少くとも自分は此の時程眞に聖代に生を享けしを感謝し、懽を滿喫したることなく、生き甲斐と働き甲斐とに熱火となりて、聖壽萬歲を奉唱し、此の時程皇運の天壤と共に極まりなき信念の天地にあふれたるを覺えしことなかりしを想ふ。

最敬禮裡に入御奉送のあと、龜山上皇の御製

世のために身をほをしまぬ心とも

あらふる神はてらしみるらん

ふと胸に浮び、畏れ多くも時局に對する御軫念の程を拜察し奉り、私に心に決する所ありき。

晴やかなるあたりの光景にも心行かず、人波に押され、人波と流れ、拾ふ歩一歩に時艱克服に思を寄せ、臣道實踐に心を碎き、朗かなりし心も何時しか、かすかなる懊惱に曇るを覺えたる、その道すがら無意識に五條の御誓文を反復しつゝありしにふと氣付き、こゝに心氣一轉。その時結論は既に胸にありたりしなり。五條の御誓文を奉戴し之を堅持し、教育に關する勅語を實踐すること、大御心に應へ奉る唯一無二の道なれといふこと之なり。

四圍の情勢は刻々に變り、國家内外の政情は時々移り行くべけれ、渝らざる

ものは我が國體の精華尊嚴にして、新しきなく、舊きなし。國民の信奉すべき道は既に定まりて動くなし。願れば我が學園の學風修練は夙に斯の道によりて定まり、今にして變革を要するなし。然れども實踐躬行の一點に於ては徹底未だしの感なき能はず。冀くは學校 聖訓實現に一路邁進せんことを。今紀元二千六百年記念論集發刊に當りて聊か所懷の一端を述べ學園報國の指針を表明す。

(昭和十五年新嘗祭當日之を記す)